

国語科話しことば教育の実践研究 (1)

— 児童が意見を交わす学習を通して —

お茶の水女子大学附属小学校 相原 貴史

キーワード：話しことばを実感する 相手の反応を大切にすること 話しを振り返る

1. はじめに

本発表では、児童の話しことば教育の中でも特に大切にしたい「相互交流」の中で、意見交換の活動を行う際の問題点を洗い出すとともに、その手だてについて考察する。

2. 研究の方向

2.1 児童の実態

児童の日常の様子を観察すると、第三者的に自分の話しことばに責任がないときはよく話すが、ひとたび個人としての意見を問われたときには口ごもってしまうという実態が見られる。

では、児童が自分の意見を述べるときはどのようなときかを観察してみると、その日常から次のような内容のときだと見てとることができた。

- ・自分の持っている知識・情報にある程度確信が持てる内容
- ・自分の経験が豊かに持っていて、実感的によく分かっている内容。
- ・自分独自の考え方が確定していたり、主張したいことがある内容。

さらに、意見を述べ易いのは、次のような場だということも分かってきた。

- ・自分と同じ内容について考えたり話したりしてくれる相手のいる場。
- ・自分の話を、否定されたりマイナス評価を受けたりしない場。
- ・自分が話すことによって、仲間関係が保てるという安心感がもてる場。

つまり、自分の持つ情報について実感的に理解できている内容で、それについて一緒に考えたり話したりしてくれる相手のいる場であると感じた時、相手と意欲的に自らの意見を交換していると考えられるのである。

2.2 児童の実態から見た課題

児童がよく意見を交わす内容として認められた項目は、児童に意見を交わさせるための場を設定する際の必要な条件とも見ることができる。

もし、題材を「自分の持っている知識・情報にある程度確信が持てる内容」になるようにしようとするならば、題材に関する情報を示すことばが児童に具体的に理解されなければならない。

しかし、話しことばについて実感がもっているか否かは児童の生活経験に左右される。それを、一つ一つのことばについて確認をとっていたのでは時間が多くかかり過ぎてしまい、間延びもしてしまう。

児童相互の意見交換の中で、話しことばを実感的に捉えられるようにするとともに、それについての考えを深められるようにすることが望まれる。

だが、話しことばはその場限りで消えてしまうという性質を持つため、児童が自分の意見を相手に伝えることに意欲的にならなければ、話した話しことばについて意識的に理解を深めることは難しい。

2.3 今回の研究の中心

今回は、次の二点の課題について研究を進めることにした。

- 児童が相互の意見交換の中で自らが用いた話しことばを意識的に実感し、さらに深めることができるようにするにはどうしたらいいか。
- 児童が、話題の内容について自らの意見を相手に伝えることに意欲的になり、更によりよく伝えようとするようにするにはどうしたらいいか。

2.4 研究の仮説

上記の課題で研究を進めるにあたり、

次のような仮説を立てた。

○児童に、ことばに対する実感の幅を広がり適宜感じ取らせることにより、その意見交換の質は高まる。

児童のことばに対する実感の幅を広げるといふことは、ことばと児童の経験との結びつきの量を増していくといふことである。

児童がそのことばを自分のあらゆる経験と結びつけて理解をしていくといふことは、そのことばに対して自信がもてるということにもなり、さらに他人に話してみたいという欲求を起こさせることにもつながる。それに加え、相手からそのことばに対して質問されたり、新たな情報を得たりすることは、児童のそのことばに対する新たな味方を加えることともなり、喜びにもつながる。

よって、児童のことばに対する実感の幅を広げるといふことは、児童の意見を交わす力を高めると考えたのである。

3. 研究的実践の設定

3.1 題材の設定

題材選定のポイントの第一としては、児童にとって資料が身近にあったりして具体例が思い浮かび易い内容であることと、興味深いなどしてもっと詳しく知りたいと感じる内容であることというのが挙げられる。

第二には、児童にとって新しい情報が得られて楽しめる内容であるとともに、多くの児童が同じスタートラインに立っている内容であるということが望ましい。

児童が実感し易い内容で、かつ自分流に頑張れば相手にはないものを見いだせるという可能性が、児童の意欲的な取り組みを生み出すと考えられるのである。

3.2 場の設定

題材がタイムリーで興味深くても、それだけではなかなか全員が意欲的かつ論理的に意見を交わすまでには活動は深まらない。意見をもつこと自体が、児童一人ひとりにとって興味深い挑戦になるとともに、自分だけでなく友達と一緒に挑戦できるという楽しみがなくては持続的

な意欲は生まれない。

そこで、今回はディベート形式の話し合い活動を取り入れた。そのことで、児童が意見をまとめるのにグループの協力を得ることができ、そして考えた意見を一種のゲーム的な感覚で意見交換ができるようにしたいと考えたのである。

3.3 立ち止まりのある活動の設定

単にゲーム的にディベート形式の話し合いを進めてしまうと、時間で区切られた中だけのことばのやりとりになってしまい、その場で生まれた疑問やことばへのこだわりなどは切り捨てられてしまうことになる。これは、後で振り返ってもなかなか再現できないものである。

そこで、ディベート形式の話し合いの中に、対戦者以外の者も加わって質問や意見交換をできる時間を設けることにした。その場に生まれたことばのイメージについて、質問したりそれに自分なりの具体例を挙げて答えたりすることによって、さらに多面的なことばに対する実感が得られると考えたからである。

3.4 振り返る場のある活動の設定

意欲的に意見を交換できる環境が整っても、言いつばなしでは意見を論理的に組み立てる力はなかなか高まらない。それは、児童は話し合うまで自分の意見の組み立ての穴にはなかなか気づけないからであるとともに、話し合ったことばは消えてしまうからである。

そこで、学習活動の中に自分達の意見交換を振り返る場を作った。自分の意見の組み立て方なり、その表現の仕方なりを自分で客観的にVTRで見直すことができるようにするのである。その活動を通して、児童が自分の意見の組み立てを再認識したり、さらによいものに高めたりすることができるような学習にしたいと考えたのである。

3.4 学習計画

① 学習目標

- ・資料を集め、それを根拠にして自分の意見を組み立てられるようにする。
- ・VTRで振り返り、自分の話し方につ

いて考えることができるようにする。

- ・自分の考えをどのように表現したら説得できるかに気づけるようにする。

②学習計画（15時間）

- i 題材について実感的な共通理解に導く。（2）
- ii 立論の中心を明らかにさせ、資料を探させる。（4）
- iii 相手の立論を予想させ、質問や反論の準備をさせる。（2）
- iv ディベート形式で意見交換を行わせる。（3）
- v ビデオを元に、自分の言いたかったことを振り返らせる。（2）
- vi 相手を説得するための話の組み立て方を考えさせる。（2）

4. 研究的実践の実際

4.1 導入

導入の素材としては、児童が何らかの形で耳にしたり目にしたりしているような話題性の高いものが望ましい。

21世紀の始まりにあたり、これから進歩する科学技術に目が向けられているようなときであれば「ロボット」などはタイムリーな素材の一つとなる。

この素材を取り上げたとき、児童は何らかの形で見聞きしたことがあるため、男女の差異なく関心を示した。

そこで「人間とロボット」という文章に触れさせ、ロボットの利点や欠点について考える方向に導いていく。

しかし、しばらくすると児童の反応が鈍くなってくる。なぜならばロボットと接した生活というものに実感がないからである。

その段階で、科学的なテレビ番組などから抜き出した映像を児童に与える。それも、できるだけ児童とつながるように、20年後程度の近未来の家庭生活を示したものを提示する。つまり、児童自身の未来の姿として映像を見させることで、自分のこととして考えられるようにするためである。

このことにより、児童はその後、ロボットのある近未来の生活についてのイメ

ージを発想することが容易となった。そして、そこから考えられる利点や欠点についての予想がどの児童にもできるようになった。

4.2 意見の準備

ディベート形式を取り入れたのは、児童が単なる正解のみに固執しないで済むようにするためである。正解を述べなければならぬと感じたとき、児童は自分流の考えに封印をしてしまうのである。

この形式の投げかけは「話し合いゲームをしよう」である。「ゲーム」ということばに、児童は気軽さを感じ、その後の学習に意欲を示した。さらに、その判定のポイントが、意見の内容の出来不出来ではなく、いかに自分たちの意見とその理由がみんなに伝わったかであることを強調したことも、児童の取り組みの姿勢を前向きにすることとなった。

意見の準備は、まず各自で二つずつ中心を考えさせ、それをグループの4人が持ち寄って、グループとしての中心を二つに絞らせることとした。一人ひとりが、自分の問題として取り組むことが大切だからである。

この結果、誰もが何らかの形で自分なりの考えを持つこととなった。

しかし、児童の考え方はその経験によりまちまちである。現実社会を元に未来をしっかりと思い描ける児童もいれば、空想がどんどん膨らんでいく児童もいる。この経験差の調整のために、教師が話し合いに加わり、グループの構成メンバーの実態に応じてアドバイスをを行った。

現実派の児童には、主に証拠としての資料の探しどころを示唆し、空想派の児童には、他教科で学んだことなどと結びつけて考えられるように示唆を与えた。

この示唆の後、児童の資料探索の様子を見てみると、児童一人ひとりが自分が何を言うためにどんな資料が必要かをよく意識して活動していることが窺えた。

4.3 話し合い

ディベート形式の話し合いでは、予め大体のことばが用意されて話される。し

かし、質問に答える場面では、児童がことばをどう実感しているかが一番問われる。それゆえ、この場面を多く持つことにより、児童はことばと結びつく実感を数多く見いだそうとするし、新たなつながりに気づくこともできると考える。

実際、「ロボットによる家事の時間の短縮」が問題にされたとき、規定の時間内では「家族の絆を深めるのに使える」という有用性のみが出ただけで終わってしまったが、後の話し合いにおいては「その分遊びに回している」という話や「自分が家事を毎日してる気持ち」の話なども出され「その時間を使う人間の気持ちの持ちようが問題にされなければならない」というところまで話しが進んだ。

4.4 振り返り

意見交換を終えた児童の多くは、自分が当初想像していたほどはうまく言い表せなかったと感じた。最初から言うことを準備していた立論の児童でさえ、相手からの質問にあって、何をどう答えるかの組み立てがとっさにできなかつたと悔やんでいた。また、その他の担当の児童も、相手の意見を聞いた上で、自分たちに都合のいい観点で相手の弱点を見だし、そのことについて話すと言うことはかなり難しいと感じていた。

しがし、何をどのように言ったら良かったのかを、その場ですぐに見いだすことはできない。そこで、記録ビデオを見て振り返らせ、自分が主張しようとしたことを再度ノートにまとめさせた。

実際に話したり、質問に答えたり、ビデオで見直したりしたことで、自分が主張しようとしていたことばが反復的に学習された。そのため、ことばが借り物でなくなったと見られる。この段階の記述を、大変スムーズに行っていた。

そこで、さらにそうやって書き出したものを、「主張したかった中心」「それを主張する訳」「それを裏付ける証拠」の三色に色分けさせた。色分けしたものをつなぐつなぎことばもあらためて指導し、自分の書いたものを読み直させた時、

「そうか。わたしの言いたいことはこういうことだったんだ」

という声が多くの子から聞かれた。

ここに至って、自分が言おうとしていたことばの意味が腑に落ち、意見として述べようとしていたことの筋が理解が深まったからだと考えられる。

5. 研究的実践の成果

児童の話しことばの学びに必要なのは、自分の考えを伝えるためにことばをどう実感し、相手との話し合いでどうその実感を高めるかということである。

- 落ち着いて自分の意見の内容を考えたら、おかしなところがあつたなど自分で気づけたし、冷静に相手の言い分を考えたら、なっとくできた。

この感想からも、相手の話しを聞くことで、自分の言うべきことがはっきりしたりおかしなところに気づけたりしたと感じていることが分かる。もし、最初に準備した意見文だけで済まそうとすれば、それは生きた意見交換にはならなくなってしまう。相手を意識し、ことばに対する実感を高めたからこそ、意見交換が充実したものになったのである。

振り返りの段階で出た声「わたしの言いたいことはこういうことだったんだ」は、ほとんどの児童が納得したことを示しており、振り返りの有用性を示している。それは下の感想からも分かる。

- 書き直して整理してみても、自分の考え、考えたわけ、証こがよく書けていないのがよく分かった。言い合うだけでなく書き直してみるのも大切だと分かった気がする。

このことから、児童が意見をしっかりと交わすことができるようになるためには、次の二点が大切だと分かった。

- ことばの意味を常に実感的に捉えられるようにする。
- 話し合いを通して、ことばの実感の広がりを感じられるようにする。

今後も、児童が話しことばを実感的に使い、相手の反応を大切にして振り返り、意欲的に話す場を作っていきたい。